

在佛雜務書類



国立公文書館

分類

排架番号

2 A

33-5

① 259

正院記

新羅國と高麗國と百濟國と三國は古くは政治法度共に通じ
 運命も同じく在りて十年来倭寇の害に苦しむる者ありては

交際も密にありては中々いふまでもなく其の情状
 殊に其の如く國を以て結交同好ありては交
 際振々として國を以て勢難くは場合も可なりては同
 心同力ありては外人を拒絶しは損益實地を調の上
 以て其の交際上をわづらひては最考可なりては其の
 意を存しては其の旨を以て其の國を以て其の粗末を



[illegible]

十月廿六

田邊友一

崇文大使 大名保副使

木 左副使 何 右副使

山以副使

音閣下

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----

由藤程云

今村和郎

右志今殺歸朝之殺之受所刺之文有之以案
四中文能大無一以達有之發以事

丙正月

餒爲新理公使

本左副使関下

有通解而弗理之傷天下之誠者蓋合以受文部者

中世より近世にかけての日本

木下副使

大使公

大少監公

河原公

山崎公

文部理事友随侍

近藤鋳三

今村和郎

有久此頃以在漢中上京通鎮三儀之儀之儀島公使方
上於之附屬人少育之所用為其年中和和郎使
當國之東洋學校之移之所望之儀之儀島公使方
政府文部令之儀島方之依頼有之儀之儀島公使方
儀之儀島方之依頼有之儀之儀島公使方
立之儀島方之依頼有之儀之儀島公使方
以儀島方之依頼有之儀之儀島公使方

卷之四

古何上

書後

岩倉公

木戸公

大名傳云

何燕公

山
石
公

小室少儀官位、自元弘以來、尚學、教、已、本、邦、
、同、中、、其、他、同、格、三、種、を、求、む、者、此、を、本、邦、
、分、以、其、國、有、之、理、を、求、分、可、致、其、原、に、復、し、通、
、在、備、を、指、稱、す、事、

一、黃金、一、百、三、百、七、十、兩、計、度、

一、佛、金、四、萬、五、百、兩、計、度、

右、金、額、段、々、所、指、召、出、候、に、不、周、候、に、候、も、左、

一、龍、動、已、里、斯、兩、府、同、閑、在、候、所、候、に、左、

利、加、未、山、ル、人、イ、タ、リ、」、並、ニ、ア、セ、レ、」、之、每、座、を、為、替、

在、座、を、預、け、至、候、金、當、十、月、十、日、西、曆、十、一、月、

右、每、座、を、廢、預、度、に、為、替、一、切、を、同、格、に、二、次、

以、候、一、別、に、有、候、に、儲、金、も、多、く、在、候、替、り、

融、通、を、審、み、以、其、國、に、同、格、に、資、用、を、通、

此等之稅之我々彼々亞米利加地方に於て久
 く滞留し目的は是れ候得る可然都府に於て
 中々或は此の間に滞在し居調度彼も是れを以
 て其の父と金額とを何分算當に立不申也
 吾人亦八百萬高郎候に加工し以て法費用
 八百萬と申可申然と云ふ所の稅は我々同其
 五人此等と云四子兩

三子

帝國視察之激、我々奉命して、
可成る所既に當
秋初、魯西亞、獨逸、連邦、他方、に巡行仕

以收其金僅步國之政治基本大同小異其
 之仍而此有名之國法與之德其止而各國
 之異同之在德以收其利害之自可明瞭一
 校路之在德以收其利害之自可明瞭一
 德之在德以收其利害之自可明瞭一
 德之在德以收其利害之自可明瞭一
 德之在德以收其利害之自可明瞭一

一 張龍料一里外之安山奎四

右二子月ヲ稼リ以テ生ニ百四十兩

一、法費因一朋者去之而此重式與

右二月之移以金百兩

一燕菜車料告人前百兩

一各寺之紙張向在法度間並立際之費

用是寺以金百兩

總計此金上萬兩也

一寺兩

本院為法用書藉其他之器械等亦求度

尤為藉之役之樂佛之他之本之經之書

居且多錄上之實效其書籍亦求山後

乃之書其大寺之友府之準備亦如也

皇在求度金百兩一連系誤誤二寺之

入及寺之金經之金金金金金金金金

其法當戒寺之金金金金金金金金

於寺四寺之金金金金金金金金

在求度金百兩一寺兩

一龍動已里斯府間之金金金金金金

向之二月之移以金百兩

的寺之金金金金金金金金

寺之金金金金金金金金

前三金金金金金金金金

右概算算計仕次出氏生額八千五百五十五
 別減者可仕處も是より且我々在調之役
 も是等年業の目的に附しては其の結
 算に於て中々中途より休業斜に致す者
 尾不整條理混淆遂に多量に在調之者
 帰して是等事務に於て其の事務に
 此等又又難題中上候に致すも其意入
 得るに因りて其の凡難に就き其の
 其等より進退を留むるに在り他
 以依頼可仕役更之を其の事務に
 其の事務に在りて其の凡難に就き其の

其の事務に在りて其の凡難に就き其の
 其の事務に在りて其の凡難に就き其の
 其の事務に在りて其の凡難に就き其の
 其の事務に在りて其の凡難に就き其の
 其の事務に在りて其の凡難に就き其の

明治五年 癸酉 二月廿

少議生 安川繁成

中議生 鈴木貫一

少議官 山室信史

少議官 高崎正風

中議官 西岡通明

大乃保大藏卿殿
伊東二郎少輔殿

新島約瑟事 理事官所用在隔以三月
隨行所免之役市人一名 中 中 中

丙正月廿八日

文部理事官田中五三磨

特命全權使節

中 中

文部理事一行東二月廿五日在出河
發程歸朝は後此旨御中願有之度
申付候也

角正月

文部理事友園子三磨

特命全權使節

甲

[illegible]

文部理事官田中三磨

特許全權保身

會計課 師

田中不三磨石

長與專齋

中島永元

廻 正 蔵

近 藤 鑑

内 村 良 藏

今 村 和 郎

和 島 コ ト レ フ ト 府 係 在

由 良 守 應

書 記 友 全

右 島 主 君 御 方 牛 乳 製 法 等 并 本 諸 島
概 買 入 方 政 一 一 概 買 入 自 身 持 子
物 一 一 心 持 一 一 概 買 入 自 身 持 子
英 米 等 等 通 行 一 一 概 買 入 自 身 持 子
も じ づ 一 一 心 持 一 一 概 買 入 自 身 持 子
今 一 一 概 買 入 自 身 持 子 一 一 概 買 入 自 身 持 子
員 一 一 概 買 入 自 身 持 子 一 一 概 買 入 自 身 持 子

大 文 一 一

此等利口之時、首に改め、多し、因に
是れ、至急、以下、下、下、改め、多し、
但、此、同、集、改、多し、以下、改、例、に、
以下、改、多し、以下、改、例、に、

明治六年一月廿四

バスボルト、多し、左、右、に、改、
以下、改、多し、以下、改、例、に、
以下、改、多し、以下、改、例、に、

田中戸籍改

随、以、川、路、寬、多、山、一、改、
以下、改、多し、以下、改、例、に、
以下、改、多し、以下、改、例、に、
以下、改、多し、以下、改、例、に、
以下、改、多し、以下、改、例、に、

紀田製作頭

和蘭、以下、改、多し、以下、改、例、に、

新儀先年陸中國鹿角郡小坂村ニ於テ銀山
 創見仕獨乙國鑛山地フライイハルクマンスヘルトク
 ラウスタル等ヲ於テ千八百六十年頃迄取行居
 候仕法ニ基キ右小坂村ニ於テ鎔鑛場取建懸
 脚一新後即年業ニテ繼普請仕居候内私
 儀理事官隨行被仰付候者獨乙國ハ罷
 越候上實地篤ト見聞仕罷歸大盛ニ至ル
 様改正可仕ト奉存居此度フライイベルクハ罷
 越實地見聞仕候處近年鎔鑛ノ法一變仕
 六十年頃マテノ仕法ハ廢棄ニ至リ當今ノ方ハ大

緊而^三以來ノ新法ノ由ニテ未タ書藉ニモ無之候ニ
付彼地ニ於テ當分鑛山師一人相雇フライヘル
クマンスヘルトクラウスタルノ鑛鑛場へ同道仕右
新法悉ク相調書類繪圖雛形ニ致脚國元へ
持歸リ直様實地へ施用仕度奉存候随テ私
儀尚ニヶ月滞在被仰付且鑛山師壹人ニヶ月
中雇代旅費取調諸入費等相見上英金八十
ポント御預金相成候様仕度奉存候此迄格別
ノ御評議ヲ以テ願ノ通被仰付被成下置度
奉願上候

正月

大島鑛山助

書記

李

平石尚府以發興自學未之在國以巡國也
 可也夫地負少賦少之極意之好承也
 有也之極之好也

一

尚府以舊秘製之小川紙定重杉山一紙五
人、和柔國之紙或提防之方法實地所調
為法教之為少也

卷二

大正

正月廿

龍江商龍

別我通東田一箇分物新近新と交教
別山家と何一箇分一箇分と指揮山
何と云

山記文

大正保公

保公

大正

[illegible]

明治六年正月

新と通ふ事なるに回中戸籍より一の法に

正月廿五日

物色宜難得也

大久保公

何處云

姜氏友

新收福之圖
款在調和歸中
款在元富福

正月

大島嶺山脚

物之通氣也。氣之通也。物之通也。

大島
正
備

新收福逸園フライイヘルクマンスヘルトグラウスタル
鑑録場へ至成軍代解宛上改曆三月
中散就福就可出資探訪仲股ノ越奉畏
候右為脚清此以望矣

明治六年正月

大島鑑山助

大島鑑山

新原重隆大副使

閣下

山光園集

新原重隆大副使
事一但使軍省定額金を以て海島
横濱の島々を以て

山光園集
新原重隆大副使
事一但使軍省定額金を以て海島
横濱の島々を以て

山光園集
新原重隆大副使
事一但使軍省定額金を以て海島
横濱の島々を以て

能保其有在無個時能改磨習地之見
 之杉山之隨行之海之川路之悔然之
 如何之可之之亦當之戶藉民之也一
 年之

同中大飛經事及分列城之通見也為善也

酒正月廿五日

書
記
室

大平臨副使

閣下

何廉別後

子中上之通傳部諸公和氣國心立
 城在如之部杉山南面與人之間予川路
 順於此いふ事と文書と順中如公川路後
 給之文可同出と云ふ如公依之改定中上公以上
 丙午月廿五日
 大藏理事友田中光顯
 傳部諸公閣下

書記發 禮之

近藤鑑三
 文部理事友田中
 今村和郎

右鑑三氏ハ獨逸語出衆者悉無人一有數島公
 使方之移之附屬上致一以用為如勅中一校
 和郎氏ハ通商當國之東洋學校之於人
 物所望之振興政府文部卿より較島方は
 依於有之儀存右方之望也中後依之可也
 朱儼之方ハ取調所用も在属事有每人

大藏

片降為方長官及後能為公使より申立りて
事案多金儀次方有文部理事方より
合致致方より引致し並差支方より越送
答より以能方能為公使より申立り通取計中
後方以能方更に及以能方也

正月廿八日

木戸副使

大使 公

大分儀 公

何處 公

山 公

私儀

是近花より上其安何と性賢魯純難堪其任と心得る
當職は免に作付致即ち別紙宣言と申元と返上仕る
而て来月初旬恭唯と佛金郵船便を以て帰船仕度と存
以何卒以度と云は是れ其と申元と返上仕る謹言と申
也

塩田三郎

山本會大使 公

木戸副使 公

大久保列位公

河原副使公

山口列位公

各閣下

新通承在元佛金満寺中此より通
法園丁五節其事

塩田篤信

依頼新免一寺書記帰國中より
事

明治六年正月廿日

特命全權使節

但佛玉満寺中此より通
為事

同文

大久保

右に記す通り在る事なり

名

月

日記友

日記友

塩田三郎儀一尋書記友に免物國の作
付は交有る渡辺洪基と先例も有る事
孝陽新公儀旧事記友に免る事
下は節々有る事

日記友

日記友

右に記す通り在る事なり
日記友

日記友

田中戸籍改定

カキ記文

明治六年正月辛酉 於法京巴里

以爲狀然上教少知多我傳教下可迴應
費用王一一此能若金或万利教多金或或
收者教多一一此能若金或万利教多金或或
教一一此能若金或万利教多金或或
者一一此能若金或万利教多金或或
中一一此能若金或万利教多金或或
上一一此能若金或万利教多金或或
り一一此能若金或万利教多金或或
者一一此能若金或万利教多金或或

不致

何遜并大補光輝

大分縣志

吉田 芳子 補履

[illegible]

司法省中律家庫入之文書多於法院
之例辭在案有之申先の次を為る大體
乃の如く被申議有之撰案要之爲る於
同省出張の官吏を被申中在るもの多
梅ノ只々教の也

9

大副使

解島每理學

外氏之通
 熊島新藩便
 一
 送之無か
 人
 徳以
 入
 の
 山
 好

司馬君理學

木匠劉陽書

是山口副使より来る書に據るに在り
此係る事

山口より山口に達
する事

所國司法省は法律家なる人より交りて正
規なる何處なるか即ち之を殺めんとす
其向ふ所に入るに及ばず殺めんとす人
雖も亦殺め同有する如き事ありしかる
以上可然と爲極まるに極まる一なる
依りて其可然なることとす

明治六年二月一日 物部金雅大副使

新島嘉理公使

文書

有之通 法傳家産ノ交 録為四年程以後
 在通者諸子日ハ今ヒハ極可ク
 以如

物家全權方副役

司法有法

官有年

大正

租税案七等出仕 由良守應
 室内有真勅

萬事御筆通當月得ハ 歐洲榮足可成
 心内ハ此等ハ受牧畜ニ取調ハ統束有ケル
 山有来儿十有進佛 即美多様ハ口限ハ重延
 然ハ有以ハ多様ハ也

但此等車牽馬ニ取替サハ見込モツル
 左ノ由上取

帝國ノ帝王馬車牽ハハ馬ヲ以テ第一等
 之者トス既ニ英ノ官既ニ榮子有之ハ白毛

大政

馬是より有る光年字國よりタイニハ送
出内右有獨乙五「ハナウ」ト歟云フ処ニテ廣
スルノ事有同家也行次ノ其價及其情
實ハ海欄道ニハ此種馬ハ買入ノ上
皇國ニ移テ畜殖ヲ為スル規程等ノ故ハ馬
車牽馬ニ備後トナシテ同國也馳走被
上佛國也知悉自合本文類也通事等中
也此種馬ハ能出格ノハ其數ハ亦ハ以上
明治六年一月廿日
難取以方ヲ以テ本署ニ送ス

野村 靖
内海右 後

再新之馬ハ其ノ通稱ニハ馬ノ以贈ルル也
ナリ

岩倉 公
木下 公
大下 瑞 公
伊藤 公
山崎 公

山江縣士族

青木周造

外務一尋書記友心長以伯林上陳錄

韓國孫士駿

長田鍾太郎

外務二書
記及心得
巴里上條

正



和佛金銀書

一佛貨二千五百三十三兩九十九サレキム也
右寺新改主申云月申佛國公使銀在
物云 既付以金銀同月より金銀四月より
去年年分以手當とて一萬八千圓中
邦外諸省に於て受取着已に後佛貨
と換ふの書と云ふヨイニトナシヨナルアジエニ
以テテ、並に金銀去冬十月同底破産理
ハ目下因迄ハ金銀の金銀地を於て有
金銀何處を佛國に仰付と云ふ故に金銀

奉 歎 彩 山 上

參 閣 正 月

外 務 中 務

工 部 松 直 綱

大 久 保 副 使

伊 藤 孫 副 使

西 公 閣 下

英 貨 七 中 外 務 中 務 中 務 中 務

從 令 社 関 在 者 中 務 中 務 中 務

之 手 續 之 以 可 成 計 事

博 文

書 記 官 各 一

一 等 書 記 官

福 地 源 一 郎

政 務

新 規 格 地 區 之 三 國 各 省 之 支 隊 振 興 刑 法

裁 判 不 實 地 區 振 興 刑 法 各 省 之 支 隊 振 興 刑 法

在 以 前 為 振 興 刑 法 之 支 隊 振 興 刑 法 各 省 之 支 隊

各 省 之 支 隊

四 等 書 記 官

池 田 寬 治

大 久 保 副 使

所用有之佛國已累討之三月留漢
在市中什貨事

但有用之佛國已累討之三月留漢

山

山

山

山

山

新改以用暇見嘆之區之仕難名客云有之能受當
歐運學之席日等素習之既之要則改辰以在
當然仕且未熟之拙故多之難少則立耳幸甚
多矣以難多之旧少仕東大曲醫之隙問仕前
路乃多之一事都念仕且歷驗少發的認發以年
之幸多之幸自田之乃公之幸入之乃在之ル之幸
和業所勝至中之接出之場也其方之幸
居所用之幸中其之幸上之幸仕其物之幸
急病少之幸少之幸其之幸其之幸其之幸其之幸

文

上

育公

福井順

有南中名山寺記

書經

卷之二

李氏

大么路么

得东云

山江公

白耳義著之上可也
具視

肥田濱五郎

和英國之調向在滿洲牙英國之京城當時
新發明鐵路之義見少可取者先設之
付之學以知之要同路之出處造之為便利之
建築法又ウイッラエドと云々因之及以石同
國之京城在鐵路之義之調以方之知也
為以知之義之知也且以之知也
之者一人此也之例我以應入仕度是知也
之知也之知也

二月十日

右三國中書省可名生何友

書記友之

二筆書記友

少松森生

博覽會所用為所板維也鋼表是也

多事

但先者之事務友中談恐裁為者
少者更其國之可也

岩多公 伊藤公

木戸公 山本公

大久保公

伯林之助野口富太郎名工部省理事
官隨行拜命以來月給何程以少少
或可也否之數發者致未諸以在之可從月
給之六毫之以用中一日英金一磅之代
以之之數之可也之在之之代

二月十六日

會計掛

書記官

中

先般文部省より米國博士モリリイ氏大學教授
として雇入度方西院より允許書を以て評議
の上其通り取計並に要員の儀家族同行被
命に就き外並に雇入外國人の例に準じて別
装被科せしむる銀五百圓に下り且又教育費
之類に要する書籍等買入持費及び其
代價として墨銀二百圓に渡り下り
中並に軍費被給せしむる存貯金に二件
全量此地に移し居替渡り方と成り申し並に

信之序其旨政府達一之部有定額金
内より大花有之返納之通ひとあるが、
其の文部理事より出給の後、
此後故職より及ぶに依りて

有吉

木名孝元

今日の日金計解りて迄

書記友一

マシ一子ジ井ゼー

價二万新度

右表測量器度分秒劃度と器械等並
而探案は所より受て常見ありて買上る
り給ふ形とあり

但陸軍省定額金より先引と致さる

原田一造

山田昭義

物部重雄大副使

周下

新通在度出而陸軍定額ハ先可
可致事

太正

一、當座上海、小阪、神戸、東京、大阪、名古屋、
龍馬、名、阪、三、都、有、理、事、友、德、村、如、前、
以來、月、給、毎、月、何、程、出、方、有、未、也、也、也、
以、報、告、有、之、後、此、後、乃、以、此、名、也、

二月廿

在英

公使館書記

方便

書記友 中

本間清雄俄昨奉年情覽會事務掛
以御旨以受在前不同之修新改增製造
監督中後置也右事務勉勵在否北
臣等亦將覽會掛閣澤以清垣國之
久所成之道也城之安法雖像有在
新氣成就其福之國語通以之
八情覽會也通以之安法雖像有在
務掛閣澤以清垣國之
以御旨以受在前不同之修新改增製造

解島舞理公使

全權大副使 閣下

太

正

三

以書狀懸上仕次紀主和官清維義而於
當地情勢會事務多仰付其管之
月一更月今就帶出送此用所將由
就通中經在之月一更月今就帶出
月一更月今就帶出送此用所將由
月一更月今就帶出送此用所將由
月一更月今就帶出送此用所將由
月一更月今就帶出送此用所將由
月一更月今就帶出送此用所將由
月一更月今就帶出送此用所將由
月一更月今就帶出送此用所將由
月一更月今就帶出送此用所將由

二月

閣下

能島辦理公使殿

外氏解書より中城之趣、一月より内務省に
 傳覽會方は是れを楊乞語を解し、其
 志多し、以て大難を成す、必死と云ふ能くも
 少松藩臣、楊逸國の用階之上、地圖
 先き少松より東京迄之知悉し、其楊逸國
 と致し、其本圖記、文院の御命、故以て用ひる
 文多し、有る方、故より好む、其少松藩臣、其唯
 今より、此二博覧會の方、其通し、一、其故
 解、尚より、其傳書、其通し、其故及
 以て、使、其也。

岩倉大使

市立副學

方公孫劉氏

何廉副任

山以副作度

善記友 卷一

當國外務省官負之ヲニバルトシテ中ニ其以接
 雖中迄物不所歸リ古水心所ハ者有去ル
 西曆十二月十八日新嘉坡内務省之山使一因
 之所歸一之始ハ日周之雖務不亦其意ハ家
 頗廣直ニ其力仕果色隨不其意ハ其意ハ其
 減省仕ハ其意ハ其意ハ其意ハ其意ハ其意ハ
 十古迄六十古之古古佛賀凡四古古佛之古
 移リ二古古古古古古古古古古古古古古古
 心買上之古古古古古古古古古古古古古古古

改定章程也

明治二十二年十月十三日

田中元吉

全權大副使 閣下

英貨ハ中磅銀五匁ノ純銀ニ同ク

太正

先達ニ出向スルハ種々所見有リ然レモ

ハ此ノ白耳義ハ此後之因リ急ニ其ノ任能ニ

以テ急ニ御所見ニ對シテ相見ハパーリス

尚且出立致シ有テハ此後之任能ニ對シテ

能ク其ノ任能ニ對シテ相見ハパーリス

有テハ此後之任能ニ對シテ相見ハパーリス

有テハ此後之任能ニ對シテ相見ハパーリス

有テハ此後之任能ニ對シテ相見ハパーリス

一維網博覽會理事及著者上岡旋方氏

其ノ松島氏ニ對シテ其ノ任能ニ對シテ

出多し格も承りし事も理事者人教を
 分りて格も用意等も難き事なれども
 地味已に在人数を承りし事も且同より
 日多し格も公使がりて過り日多し格も
 城ヶ島館へ立寄り格も用意等も難き事
 川路公使がりし事も承りし事も且同より
 在人数を承りし事も用意等も難き事
 又ハ格も承りし事も用意等も難き事
 在人数を承りし事も用意等も難き事

癸卯二月十日

寺島宗則

大副使公

名関下

十三日返書あり

但何處より水あり

大正
正
三

二番書札

山形県立

右横地利國博覧會事務局長

心持

但ふなりやある同業費向の誠意の

大
正
三

外國之教師四名在學入之議中其有在四

名之教師六名何之科目之書之如何之事務

總理事務者教員見之其利其害之如何之調

在學入中其利一應之如何之如何之如何

以上之如何之如何之如何之如何之如何

如何之如何之如何之如何之如何之如何

當今之如何之如何之如何之如何之如何

之如何之如何之如何之如何之如何之如何

如何之如何之如何之如何之如何之如何

壬申十月
中議生 鈴木賢一

少微宦高崎心風

中藏書西岡論明

勅旨ヲ熟考スルニ所謂並立トハ文明ノ治ヲ教レバ

互ニノ權利ヲ以テ交際ヲナサレハ真ニ並立ノ種ニ適
スルヲ得ニヤ今日歐洲各國トノ此交際ニ於テハ喻ニ
ハ無識者ノ有識者ト云ルカ如ク彼ニ及サル者多トス
然ルニ今多識ヲ以テ有識ニ交ラサル時ハ畢生其
智識ヲ擴充スルヲ得ニヤ抑歐洲ノ文明ト稱ス
ルヤ内治郡縣ノ制人民一致ニ政事規勑アリテ
綱ヲ舉クニ日月張ルト謂フ可キナリ民法邑法商
法刑法民法ヲ修トシ議負ノ選舉諸學藝兵制

及ヒ統計運輸ニ至ル迄一切秘密ナラサルハナシ是
ヲ以テ人オ輩出ニ國富ニ兵強ク遂ニ各國同等
ヲ以テ吾オ在支際スルヲ得ル者畢竟其權力在
均シキヲ得ルハナリ今

皇國ノ諸續ヲ顧ルニ右ノ諸件總テ歐洲ノ如ク整
密ニ至ラズ名ハ並立ト稱スルト雖モ其實ハ未タ並
立ニ至ラサルナリ故ニ本院少儀ノ要旨ヲ示ス
彼ニ及サル所以ノ者ヲ及省ニ其制度文物ヲ一切
ノ庶務ニ至ル迄其善ナル者其美ナル者我民性
ニ慥ニテ准據ニ裨益アル者ヲ採擷採用之ハナ

並立ノ要旨ヲ表セトス是即チ今日大目的トナシ可キ
事

辛未八月

右正院ニ伺ヒ濟ノ上本院申ニ公告ヲ成タル儀ニテ
系ニ儀此年適用能ハル調査モ本文ノ旨趣ヲ體
認スル在支事ニ以テ

字内ニ並立スルノ

勅旨ヲ奉スルニ當リテハ豈ニク歐北文明各國ノ制
度ヲ嚮求ニ其宜ニキヲ採用シテ以テ旧政ヲ改革
ニ開化ノ域ニ進マシムルニ有之能ルニ其風俗人情

自ルヲ我ト云ふ事ナルアレハ專ラ其方策上ニ存スル者
以テ我々之ニ移シ施行スル時ハ國體方柄ノ弊ヲ
免レサル者アリテ立法ノ間ニ於テ多クノ阻礙
ヲ生スルハ仍テ今又覆テ之ヲ考ルニ歐洲各國ノ謀
務ハ明瞭ナル者ニ就ヒテ之ヲ廣ク問ヒ彼ノ實情ト我ノ
實際トヲ照融通シ且我々情事諸ニ適スルヤ
否トヲ議求セサレハ妙アリキ者ニ按テ制度ヲ確
定スルヲ得ルヤ是ハ今日雖新ノ基礎ヲ建トスル
時ハ歐洲各國ノ内ニ於テ其國民法民法租稅法統
計司法等ノ條件ヲ分チ其實情ニ準リクル有名ノ

外國人七八名計リモ所雇入レ上各々分課ヲ以テ顧
問ニ備エ茲ニ職負ノ内某々ハ何省掛リ某々ハ府
縣掛リト是亦各々分課ヲ立或ハ書籍ヲ配ハ或ハ
教師ニ與ヒ其課内ノ事務ハ最モ明晰ニ推窮然
レ且其分課ヲ以テ二三名宛西洋各國ニモ航海致
其實際ヲ目撃シ之業既ニ教師廣ク問ヒ或ハ又書
籍ニ就ヒテ研究スル者ト比照シテ益々其智見ヲ擴
充スル法ノ職令スト謂フ可キ歟若シ如此ナラスレ
テ一旦制度確定スルハ其志ラクハ實際施行ノ上
於テ阻礙アルヘケレハ隨テ令レ隨テ改ムル様ニ成

法ノ権自惣他局ニ移リ盡クタル本院モ終ニ長沙
ニ屬ス可ニ是今日ノ着眼トスル所ニシテ伏テ上裁ヲ乞フ
所以ナリ

辛未九月

右正院ニ上陳ノ所教師以雇入儀法評議所為裁
事ニ此座歟

我々改訂國內教程ノ節兩議長ヨリ口頭ニテ左ノ通
リ本院ニ於テ外國教師以雇入レノ故ハ正院ニ於テ
最早以評議所為裁歟モ有ク且本院ノ章程所
確定ニ於テ法律ヲ議スルハ本院ノ主務ニ於有之

ハ外國ノ制度法律及ヒ諸規則等ニ明晰ニ無之テハ
片時モ不相適ニ付歐地着上

物家大使ノ指揮ヲ受ケ福逸ニ於テハ學問ニ達スル
者一名佛蘭西ニ於テハ法律ニ達スル者一名暎暗ニ於
テハ經緯ニ達スル者一名亞米利加ニ於テハ開拓ニ達スル
者一名篤ト人選知以雇入ルル事被裁裁所為

可中事

右者以頭ニテ沙汰有ク且正院ヨリモ右ノ趣意被
ニ法裁合カレト事被裁

我々所裁之旨趣ヲ以テ目的ト致シ是迄取調裁

在次乃在本邦歴上ニ於テ推考セラルル事也此
ヲ目撃セタル形勢ニ在リテ其ノ制度ノ未
知ニ一ニ是同ヲ指摘シ各國政治ノ得失ヲ論究
スルノ事也是皮膚之論説ノミテ腦ヲ採リ髓ヲ擷
ハズ那及ヒ東洋各國ノ治乱興廢亦莫ナリ凡ソ
夫那ノ治乱興廢ハ兵權ノ平分ナルト偏重ナルト
アリ其ノ制度ヲ建ル勉メ其兵權ヲ抑制ス歐
地各國ノ治乱興廢ハ人民權利ノ分界其當ヲ得
ルト否ナルトニアリ故ニ其制度ヲ建ル政府ノ權ヲミテ

甚シカラシメ又人民ノ權利ヲミテ正々輕ラシメス
恒ニ中庸ニ當リテ其ノ制度ヲ建ル時ホロ子ルノ覆滅近
時トルコノ擾亂其源由ヲ尋メハ人民權利ノ分界
ニ於テ其條理ヲ求候由尙今歐洲各國ニ於テ
其能任其意欲スル人民權利ノ分界ニミテ建
國之大典モ之ヲ為メ其ノ増減スル者アリ制度モ
之ヲ為メ其ノ改革スル者アリ且議政行政ノ兩大
權ヲ區別シ審判事務ノ體裁ヲ明ニシ且地方政治
ニ於テ大小之事業ヲ以テ租稅賦納ノ法則ヲ
詳ニスルカ如キハ亦人民ノ權利ニ關係セラルル事ナ

是歐洲各國の法の大綱ニテ素より符契ヲ合
スルル如シ其政事ヤ兄弟ナリト稱候テモ可然歐奉
存候如シ片歐洲各國各其習俗アリ沿革アリ制
度ノ未ダ知リテハ一二ノ異同アリ或ハ郵便事務ヲ以テ
他國事務省ニ合スル制度アリ或ハ殊ニ郵便事
務省ヲ專クノ制度アリ其他被ヲ合ニ此ヲ殊ニスルノ
制度ハ多ク其爲其合スルヤ復再ヒ殊ニスルモ知ル
可カラハル者アリ然ルニ彼此ヲ比較較其其施政ヲ
得失ヲ論評欲ハト申テ云々亦豈本邦ニ於

テ裨益スル所アラシヤ是故ニ其理由ニ溯リ制度ノ
由テ起ルル交ヲ請求セハ他日

朝廷ヲ於テ建國法法を建在知ルニモセヨ民選議
事院亦法を建在知ルニモセヨ其分ノ一ハ裨益中ニ
在モ可ク其政事存候仍テ小室サ議官安川サ議
士ハ英國議院在英國議政行政兩權ノ區別民
權ノ分界及ヒ議院ノ結構等取調居西岡中議
官高崎サ議官鈴木中議士佛蘭西議院在佛
國議政行政兩權ノ區別民權ノ分界佛國九省
事務ノ分權地方政治ノ體裁國議州議邑議

諸院ノ分權ト建國法等ヲ互調又傍ラニスタテス
チツキムノ結構モ備求仕中ハ有リ以テ其ノ付教沙
所入レノ倣モ第一各國ノ建國法ニ熟達致人
選擇仕度有建國法ニ熟達致人必ス各々ノ政
治諸法律ニ熟達致人第二議院ノ體裁ニ熟
達致人右議院ノ體裁ニ熟達致人右議院ノ
之ノ界ヲ推テ必ス明晰ニ可有之第三地方政治ノ
熟達致人第四經商ノ事務ニ熟達致人
人等選擇仕吏ノ事務務務被為致人本
院ノ法用仕吏ニ可申致人仕吏之ヲ要スルニ寧
口

數名ニシテ預カタル小學士ヲ得ヨリハ一名ニシテ博
學卓識ノ士ヲ雇入レ在米致人本院ノ法為リ且
朝廷ノ以為メ欺トモ有ハシ制度ノ第一拘リ假令其得
失ニ明瞭タル者アレアルト雖モ吏ヲ憑據トシ又行政
法ノ源由ヲ了得スル倣モ有モ其致人教沙ヲ雇ヒ
其課目ヲ當ルモ其大本ヲ以テスル是今日本院ノ急
務歟奉存致人以上

西岡中議官

高崎少議官

壬申十月

小室少議官

九
正

書札友 卷一

有之通中出以教師以應之義以許之在是也物
又以語議以應之也

此

人之能事可及故以是進之

丁巳仲夏

太一記

山口副使翁

岩倉公
木戸公
大久保公
伊藤公
山口公

何事何事受悔能之様う三六の故に當人の時今也
見出此等之故に事の事なり

是般理は商務交工部有理事及地計
に依るは一時に成る所用為後六元書
生に改めたりとて理事及地計の故
に一に改めたりとて理事及地計の故

成り

二月八日

公使館書記

大佐附書記長

紋衣也

二月九

般島雜理公使

全權大副使閣下

岩倉公

木戸公

大久保公

伊藤公

山田公

本官ヲ免可為般島中立之通事

書記友 禮之

岩倉公

木戸公

大久保公

伊藤公

山田公

先、般島公使方より引渡され、元文部卿理事官に

引合付られ、即ち、般島府東方國語學校教授

武補に、その後、般島公使方より、般島公使に

文部卿に、外務卿に、般島公使に、

般島公使に、般島公使に、般島公使に、

般島公使に、般島公使に、般島公使に、

以上

二月十日

以差役

今村和郎儀當國東方國語學校之教授
試補之在左氏文部卿之御意一外務
卿より貴雖之為多之有無尋哉之小難事
故之有之統一統帳故之上為本人引渡之事
在本文之通以在計之可之有之也

二月十日

特命全權大副使

數島辨理公使殿